

【主は私の羊飼い】

[新年礼拝]

『詩篇』

23篇1節

熊谷 徹

2015年1月4日

茅ヶ崎同盟教会

新年礼拝説教

【序】謹賀新年；

今年は羊年。羊はクリスチャンにとって馴染みの深い動物である。最初のクリスマスの夜、メシヤ降誕の知らせが届けられたのは、羊飼いが夜、羊の群れの番をしていた時だった。キリストは、ご自分を「羊飼い」になぞらえ、私達を羊にたとえて教えをなされた。ダビデは詩篇23篇で「主は私の羊飼いである」と言った。この詩篇23篇は聖書の中でも最も有名な箇所の一つであり、名説教者チャールズ・スポルジョンはこの詩を「詩篇の真珠」と呼んだ。まさに「詩の中の詩」と呼ぶべき素晴らしい詩である。今朝はこの詩篇から「私達の羊飼い」であられる愛の主を崇めたいと思う。

【1】表題「ミズモール・レ・ダーヴィド」；

(1) 先ず表題「ダビデの賛歌」。原語のヘブル語では「ミズモール・レ・ダーヴィド」。「ミズモール」は「賛歌」と訳されている。この言葉は「弾く」とか「歌う」という言葉から来ている。恐らく弦楽器の伴奏で歌われる「賛歌」として作られたのであろう。昨年12月の祈祷会で私はエルサレムから持ち帰った2分の1シェケル硬貨をお見せした。そこには日本の菊の紋章に似た絵と、メノラーと呼ばれる燭台と、「ダビデの豎琴」とおぼしき豎琴が描かれている。ダビデは豎琴の名手であり、サウル王が怒り狂った時に得意の豎琴を引いて王の気持ちを静めたことがある。

(2) 次に「レ・ダーヴィド」とある。これは「ダビデのための」とも「ダビデによる」とも訳せる。内容から見てもこれは「ダビデによる」という意味であろう。即ち「ダビデによるミズモール」「ダビデが作った賛歌」である。ダビデは若き日に羊飼いをしていた。その少年時代の羊飼いとしての思い出がこの詩の背後に横たわっている。成人して王となったダビデは、若き日の羊飼いの経験を思い出しながらこの詩を作り、曲を作り、豎琴を弾きながら朗々と歌ったに違いない。謂わば元祖シンガー・ソング・ライターである。

【2】主は私の羊飼(ヤハウエ・ローイー)；

(1) 詩人ダビデはこのように歌い始める；「主は私の羊飼。私は、乏しいことはありません」。文語訳だと、「エホバはわが牧者なり、われに乏しきことあらじ」である。原語では僅か4語；「ヤハウエ・ローイー・ロー・エフサール」。古代ヘブル語の簡潔さと力強さを示す典型的な文章と言われている。これを原文の順番通りに直訳すれば、「ヤハウエはわが牧者。われ乏しからず」である。

(2) 「羊飼。牧者」とはどういう人か。「羊飼」は「羊を飼う」と書くが、単に飼うのではない。羊を守り、育てるのである。その為には労苦を惜しまず、犠牲を払うことも辞さなかった。羊飼いは羊の群れを草と水のある場所へと連れて行った。迷い易い羊たちである。羊飼いは羊が迷子になるとこれを捜してどこまでも歩いた。病気にも弱い羊たちである。羊飼いは弱った羊を寝ずの番をして看病した。何の力もない羊たちである。羊飼いは狼などの攻撃から羊を守った。羊飼いは羊たちを心にかけて、これを守り、大事に育てた。

ダビデ自身がかつては羊飼いだっただ。羊飼いだっただダビデは熊や獅子と戦って羊たちを守った(1サムエル17章)。それは命懸けの戦いだっただ。大事な羊たちのためなら、その戦いも苦痛ではなかつただ。彼は、羊飼いが羊に注ぐ愛と労苦を知っている。羊を守り育てることの難しさ大変さを知っている。時には獣たちと命懸けの戦いをしなければならないということも体験している。その彼が、主・ヤハウエを羊飼いに譬えて「ヤハウエはわが羊飼(ヤハウエ・ローイー)」と歌うのである。彼は、変わることなく自分を守り続けて下さる慈しみ深きお方として主を見つめている。羊を愛し、守り、育てる羊飼いのように、自分を愛し、守り、導いて下さるお方として、神に絶対の信頼を寄せている。その信頼が、「主は私の羊飼(ヤハウエ・ローイー)」という言葉に凝縮されているのである。

【3】私は主の羊である；

「主は私の羊飼である」ということは、「私は主の羊である」ということである。では羊とはどういう動物なのか。かつて羊飼いをしていたダビデは羊のことを良く

知っていた。

①羊は愛すべき動物である。大人しくて可愛い生き物である。我が家の子供たちが小さい頃、横浜の「こどもの国」に連れて行ったことがある。そこでは羊が放し飼いされていた。子供たちはオッカナビックリ近づいて行くのだが、羊はおとなしく草を食べている。それで子供たちも安心して草をあげたり撫でたりしてあげる。やがてフサフサした毛を触って、「セーターみたい！」と言って大声をあげる。セーターの原材料なのだから当たり前だが…。子供が大声を出そうが触りまくろうが、羊は驚いたそぶりを見せない。実に大人しくて可愛い動物である。

②愛すべき羊だが、弱い上に少々愚かな動物である。4節に「むちと杖」が登場する。これは羊飼いの必需品であった。野獣と戦う時の武器ともなるが、それ以上に、弱くて愚かな羊を守り導くのに必要なのである。羊飼いだビデも「ムチと杖」を使って羊たちを守り導いた。羊は集団で行動するため、一匹が何かを見つれたり恐怖に駆られて突然走り出すと、他の羊も付和雷同、何故走るのか考えもせずに走り出す。そのような時に羊飼いが使うのが「むちと杖」である。

羊は群れを作って寄り添わないと生きていけない。それなのにどの羊も自分のことしか眼中にない。治め難きものにして羊の群れの如きはない。

③キリストが語った喩え話に「迷子になった羊」という話がある(Mt18:12-14)。羊は帰巢本能がなく、しかも近眼である。羊飼いやから離れて勝手な道を歩き出したらたちまち迷子になってしまう。しかも自力で帰ることができないから、野垂れ死にするか野獣の餌食になって死んでしまう。羊飼いやから離れて一人迷い歩く羊ほど哀れなものはない。

だビデはそうした羊の弱さ・愚かさを知っていた。羊を守り育てることの難しさをよく知っていた。その上で彼は自分を「羊」にたとえて「主は私の羊飼いや」と言っているのである。弱くて愚かで迷い易い羊のような自分を、愛し、守り、導いて下さる神・主を羊飼いやに譬えてこの詩篇23篇を作ったのである。

【4】われ乏しからず(ロー・エフサール)；

(1)ダビデは「われ乏しからず(ロー・エフサール)」と歌う。これは、羊飼いである主に守られ導かれている羊としてのダビデの心からの告白である。

パレスチナの自然は厳しい。灼熱の太陽、水も草木も殆どない荒野、そのような厳しい自然界の中にも、羊飼いを信頼して羊飼いについて行く羊たちは、羊飼いに導かれて豊かな水を飲むことができるし、青々した草を食べることもできる。そのことを歌ったのが次の2節である；「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」。そうした素晴らしい恵みを一言で言い表したのが「われ乏しからず(ロー・エフサール)」という言葉である。

(2)スイスの聖者と言われたカール・ヒルティは、「この恵みは、平坦な、ぬるま湯のような、或いは漫然と手に入れることのできるような恵みとは違う」と言っている。ヒルティは、この詩篇23篇の直前に詩篇22篇が置かれていることを重要視する。詩篇22篇は、「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。」という祈りで始まる「慟哭の詩篇」である。神に捨てられたと思う絶望、救いを祈り求めても得られないという苦悩の中から発せられた「魂の呻きの詩篇」である。そうした苦しみと絶望と呻き…それらのことを通り抜けてこの詩篇23篇に到達するのである。

ヒルティはそのことを指摘した後にかこう語る；「真に憂いのないただ一つの状態は、人間の生得の(生まれながら持っている)素質ではなく、何か幸運な外的環境の所産でもない。それは、苦しんで獲得した、より良き幸福である。(中略)我々は、詩篇23篇に美しく描かれているような、そのような永遠に変わらぬ確実な幸福へ達するべきであるし、また達することができるのである」。

(3)ヒルティは、「詩篇22篇をくぐり抜けてこそ詩篇23篇の真髄に至ることができる」と言う。この指摘は鋭く、深い。人生というものはそういうものである。羊もそうである。羊は厳しい大自然の中を歩き続けなければならない。見渡す限り岩と砂、焼けるような太陽、一体どこに緑の草と水があるのか分からない。羊を取り

困む状況は過酷で厳しい。だが、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。羊の長所の一つが忍耐強いことである。忍耐強く羊飼いの後を黙々とついて行く羊は、苦しみと困難の続く道の彼方に祝福が待ち受けているのを知るであろう。

(4) 私達の人生も同じである。今、苦しみの中にある羊たちよ。今、悩みの只中にある羊たちよ。詩篇22篇のように、「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか」と呻くがよい。キリストが十字架の上で叫んだのがまさにこの言葉であったということ思い出すが良い。しかし、絶望するなかれ。羊たちの前に横たわる荒野の向こうには「いこいの汀(ミギワ)」があり、「緑の牧場」がある。乾いた喉を潤す命の水があり、飢えた魂を満たす命の糧がある。まことの羊飼いである主を信じて生きて行くが良い。そうすれば、いつか必ず、心の底から、「主はわが牧者、われ乏しきことなし！」と言える日が来るだろう。その時、ヒルティが、「苦しんで獲得した、より良き幸福」と呼んだ幸福、「永遠に変わらぬ確実な幸福」と呼んだ幸福、即ち神が与えて下さる真の幸福を得るに違いない。

【結び】まことの羊飼い・キリスト；

(1) 「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません」(新改訳)。原文では僅か4つの言葉から成るこの短い言葉の中に、素晴らしい恩寵・恵みが秘められている。主ヤハウェが私達の羊飼いであるならば、私達は主の羊である。私達が主の羊だということは「私達は主のものである」ということである。私達は主の羊であり、主を「わが牧者」として持つのである。そうだとすれば、私達は一切を所有するのである。宗教改革者カルヴァンはこう言っている；「主が我らの神であり給いさえすれば、我らは一切の恵みの充満にも救いの確信にも、何ら欠ける所はない」と。こうカルヴァンが言ったように、主を「わが羊飼い」として所有する者、それ故にまた主に所有される者は、「何ら欠ける所がない」のである。まさに「ヤハウェはわが牧者。われ乏しからず」(私訳)である。

私達に必要なのは魂の「羊飼い」である。私達の人生に必要なのは「良き牧者」である。キリストは私達の魂を「緑の牧場に伏させ、憩いの汀に伴いたもう」

羊飼いであり、「わが魂を生き返らせたもう」魂の牧者なのである。

(2) 私達の魂の牧者となるためにこの世に來たりたもうたお方が、救い主キリストである。人となり給いしヤハウエ、キリストはこう仰っている;「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。…わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」(Jn10:11,14)。私達は弱く愚かな迷える羊である。キリストはそんな羊の牧者となって下さり、羊を罪と滅びから救うために十字架に「いのちを捨てて」下さった。

そのお方がこう仰るのである;「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。」(Jn10:14)。私達の「良い牧者」であるキリストは、私達を「わたしのもの」と言って下さる。「良き羊飼い」であるキリストは、私達のことを私達以上に良く知っておられる。弱さも愚かさも罪深さも全てを知った上で、受け入れ、愛して下さる。そして、「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。…わたしが、あなたの神、主、…あなたの救い主である。」(Isa43:1-3)と仰って下さるのである。それだけではない、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(Isa43:4)とさえ言って下さるのである。

(3) まことの「羊飼い」であるキリストに出会う前の私達は「迷える羊」であり「羊飼いのいない羊」であった。だが今は違う。キリストが、私達を愛し私達の羊飼いとなって下さったからである。ペテロはこう言っている;「あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです」(1Pt2:25)。

(4) 新しい年が始まった。この一年、「たましいの牧者であり監督者である方」から目を離さず、羊飼いなる主の御声に耳を傾けて、歩んでゆこう。

ダビデの如く私達もこう歌おう;「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」と。◇